

第6回講義

➤ 分極した誘電体の個々の分子は「\_\_\_\_\_」

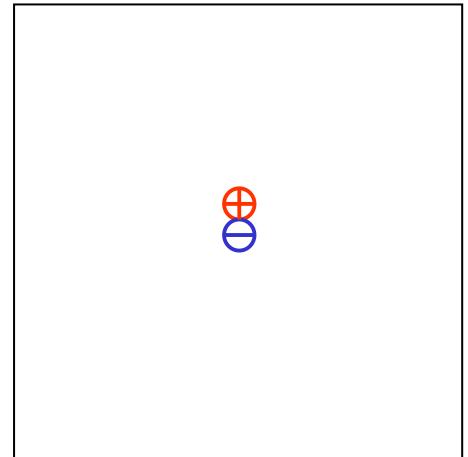
でモデル化される。計算すると電場は右図の様になる。

➤ 電気双極子を特徴づけるベクトル量,

「\_\_\_\_\_」は「\_\_\_\_\_」と

「\_\_\_\_\_」の積である。ベクトルの向きは負

電荷から正電荷に向かう。



➤ 巨視的分極と  $\mathbf{P}$  と個々の双極子モーメント  $\mathbf{p}$ , その密度  $n$  の間の関係:

\_\_\_\_\_.

➤ 系に誘電体があると、今までのようにガウスの法則  $\epsilon_0 \text{div} \mathbf{E} = \rho$  を適用して電場を求

めるのは難しい。なぜなら、電場が掛かった誘電体は\_\_\_\_\_電荷を生じ、

それを考えなくてはならないが、その大きさは一定ではないから。

➤ 一方、分極の大きさはその場の電場  $\mathbf{E}$  に比例するという近似が成立。式で書くと、

$\mathbf{E}$ , 電気感受率  $\chi_e$  と  $\mathbf{P}$  の関係は\_\_\_\_\_.

➤ 分極電荷を含んだガウスの法則,  $\epsilon_0 \text{div} \mathbf{E} = \rho + \rho_{\text{pol}}$  を, 上の関係を使えば  $\rho_{\text{pol}}$  を含まな

い形で表せる。それは  $\epsilon_0 \text{div} \mathbf{E} = \rho + \text{_____}$  という形。これを,  $\text{div} \mathbf{E}$  で括れば,

$\epsilon_0 (1 + \chi_e) \text{div} \mathbf{E} = \rho$  と表すことができる。

➤  $\epsilon_0 (1 + \chi_e)$  なる量は、真空の誘電率と同じ次元で、誘電体中での  $\text{div} \mathbf{E}$  と  $\rho$  の比例定数

である。ならばこれを「物質の誘電率」と定義し、記号  $\epsilon$  で表そう。つまり、

$\epsilon = \text{_____}$ .

➤ ここで,  $\epsilon \mathbf{E} = \mathbf{D}$  なる物理量を再び「電束密度」と定義する。結局、微分形のガウス

の法則は誘電体があっても\_\_\_\_\_と書ける。